

2020年 7月5日礼拝式次第

日本基督教団半田教会
横山良樹牧師

招詞 : イザヤ 43 : 1

讚美歌 : 21-58番 (み言葉をください) より2番のみ

御言葉をください。吹く風のように強く 救いの主よ
からみつく罪 根こそぎされて
いのちあらたに 芽生えるために

詩篇交読 133篇

祈 禱

教会のかしらである主イエス・キリストの父なる神さま、今朝も、あなたがわたしたちを御許に招き寄せてくださり、いのちの御言葉によって、わたしたちを養ってくださることを感謝いたします。2020年の半分を過ごし、7月最初の主日を迎えたわたしたちです。新型コロナウイルス感染症対策に揺れた半年を過ごしました。いままた都市部によっては感染者が増えるところが現れ、あらためて感染力の強い厄介な病であることを思わされています。またこのときに、九州熊本鹿児島を中心に豪雨による河川の氾濫で多くの人々が家や財産を失いました。命を落とした方々もおられます。被害の全容はこれから日を追って明らかになっていくことと思いますが、二次災害を防ぎ、どうか被災された方々のかたわらに立つことの出来る支援が出来るように所轄の官庁はじめとした救援スタッフの方々をお守りください。とくに高齢の方、病の方々の上に、格別の顧みを与えられますように導いて下さい。愛知の教会も6月に入ってより、すこしずつ依然と同じような礼拝と活動に戻ろうとしています。わたしたちの教会も、感染症対策を行いながら、あなたを礼拝する時を守り続けてきました。主を喜び祝うことこそ、わたしたちの生きる力です。どうか、あなたがこの礼拝の時を用いて下さり、あなたの御顔をあおいで満ち足りて生きる者とならせてください。わたしたちを作り替え、あなたの御業を現わさせてください。この祈り、主イエス・キリストの御名によって祈ります。

アーメン

聖書朗読 : テサロニケの信徒への手紙 2 章 17～3 章 5 節

讚美歌 : 21－210 番「来る朝ごとに」(1 番)

来る朝ごとに 朝日とともに 神のひかりを 心にうけて
みいつくしみを あらたにさとり

説教 : 「あなたがたの顔がみたい」

今朝、わたしたちに与えられている聖書箇所はコロナウィルス感染症対策に翻弄された 2020 年のわたしたちにとっては、心の寄せやすいというか、ああ、本当に、兄弟姉妹とともに顔を合わせて語り合い、祈りあい、主を賛美したい、という願いにおいて共通している箇所だと思います。パウロはテサロニケでの福音伝道の結果、ユダヤ人から社会を騒がす者として告発を受け、町を巻き込む事件ののち、この町を離れました。そういう苦難を受けたことはこれまでも互いの間で語られておりましたし、いま離れた場所にいるパウロは、残してきた信徒たちが同じような苦難に遭っているのではないかと案じて、テサロニケ行きを希望しているがかなわない。何とかして行って、あなた方を励ましたいのだが、自分が行くことはかなわないので、テモテを派遣するということを述べています。互いに集まって顔をあわせて喜び、苦難のなかにある兄弟姉妹を福音によって励ましあいたいと願うパウロの姿は、社会的要請により、礼拝・諸集會を自粛することが望ましいという同調圧力のなかで過ごしてきたわたしたちにとって共感しやすい箇所です。不要不急と人々は思っても、わたしたちにとっては必要であり、急務である礼拝、つまり、信仰による命を、肉体の命と同じか、それ以上に大切に捉える信仰者にとっては、顔を合わせることでできない数か月というのは、現在のように、電話で声が聴け、場合によってはスカイプや、Zoom などによって画面越しに顔が見える事態であっても、直接に同じ空間で、同じ時を過ごす恵み、喜びについて、改めて考えさせられる機会となったのではないかと思います。とくに社会のそれぞれの場所で過ごしている信仰者がひとつに集められる日曜日の礼拝のもつ意味を思わされます。半田教会では今でも新型コロナウィ

ルス感染症対策で二部に分けて礼拝を行っているために9時の礼拝に参加することを決めている人と10時半の礼拝に参加する人たちが会っているわけではありません。わたし自身は一部、二部に、夕礼拝を加えますと、教会員の兄弟姉妹の顔を通して見る事が出来るので迂闊にも気づかなかったのですが、先日、祈禱会で久しぶりに会ったと挨拶を交わす教会員を見て、ああ、そうかと改めて思わされたことです。顔と顔をあわせて見る事、同じ場所に集い、神を仰ぐと共に、同時に横のつながりと言いますか、信徒同士の分かち合いの大切さを思わされます。教会員同士が互いに牧会を分かち合うプロテスタント教会の在りようが伺えます。この散らされている人々が集められて礼拝をすることによって強められるという流れは教会の歴史を紐解きますと、たとえばバビロン捕囚から帰還し、礼拝を行ったイスラエルの民の様子をネヘミヤ記は、民は広場に集まって一人の人のようになったと記しています。この表現は非常に示唆的と言いますか、それぞれ異なった人間でありながら、神を礼拝する民として一つとなる。一つに結ばれる機会を与えられる。この主にあるつながりを生きる礼拝が重要なのです。礼拝はイスラエルにおいては、主にまみえるための機会でした。もちろん、神さまを肉眼で見ることはできませんが、御顔を仰ぐ日はいつか、と礼拝の時と場所を待ち望むことは、神の民にとって呼吸や食事と同じように自然で欠くことのできないものでした。聖書は偶像礼拝を禁じていますから、神の全身像を姿で現すような仕方での美術や、像などはイスラエルでは発達しませんでした。しかし、旧約聖書には、いたるところに神さまの顔についての表現が出てきます。御顔を尋ね求めます、御顔を隠さないでください、御顔を向けてください、あなたの御顔の光の中を歩むといった表現が見て取れます。神さまの生ける働き、ご臨在の象徴として神さまの顔が使われる。礼拝においてわたしたちは、あたかも人と人が顔をあわせて会話をするように、「イスラエルよ、聞け」と呼び掛ける主の御前に出て、語られる主の御顔を信仰によって仰ぐのです。新約聖書で使われる「人間」というギリシア語は「アンスローポス」といいますが、これのもともとの意味は「顔をあげた人」だと言われます。聖書の世界観においてわたしたち人間は、決して人間だけで立ったり、みずから足りる存在ではありません。創世記の人間の創造の記事には、わたしたちは神に似せて造られた「神のかたち」を宿している存在であり、それは神さまとの深いかかわりの中に生きることを本質とする。つまり、「顔をあげて神を仰ぐ人」が人間であることを意味します。神の呼びかけに顔をあげて応答する存在であることが、わたしたちを混沌や虚無から守るのです。この神をあお

ぐために顔をあげた存在が人間なのだという聖書の理解を弃えておきたいと願います。このように神に愛され、創造された人間が、互いに、この地上に生きるに際して、神の教えによって人格と人生と共同体をかたちづくる信仰生活において、たがいに顔を合わせることは欠かせません。いまのように電話を始めとした通信網が発達している時代ではありませんから、これはなおさらです。パウロは、いま彼の持病であった病のためにテサロニケを訪問することの出来ない状態にあり、自分が後に残してきた群れのことでも心を痛めている。それは「みなしごにした」という表現を使うほどに強い感情であったことに心を打たれます。あなたがたに会いたい、あって励ましたい、悪しきものに誘惑されないように、そばで支えたいという伝道者の想いが伝わってきます。今回、わたしはパウロ自身が使った言葉から、「あなたがたの顔が見たい」という説教題をつけました。これは実際、その通りの想いをパウロが抱いていたことが書かれているのですが、この箇所を繰り返し読むにつけ、そう、これは神さまご自身が、わたしたちに対して抱いておられる思いを引き継いだものだと思ったりしました。礼拝の招きの言葉に使われるヨハネ福音書のことばに「しかし、まことの礼拝をする者たちが、霊と真理をもって父を礼拝する時が来る。いまがその時である。なぜなら、父はこのように礼拝する者を求めておられるからだ」という主イエスの招きの言葉があります。この礼拝する者を求められる神に、人間とともに歴史を歩んでくださるわたしたちの神の姿があります。教会の力の秘密は、このように、わたしたちとの人格的な交わり、応答の関係を求められ、顔と顔を合わせて語り合うことをお許しくださる神にあります。この神の願いと招きに基礎づけられて、主にある兄弟姉妹の交わりがあります。パウロは、ここに立って、互いに愛し合いなさいという主イエス・キリストの教えに忠実に生きているのです。あなたがたの顔を見たいと願っているのです。わたしたちが教会、すなわち主に召し集められた群れにおいて、互いに顔を合わせて喜ぶのは、神さまご自身が、わたしたちを招き、礼拝することを喜ばれる。いうならば御顔を仰ぐことを望んでおられるからです。この礼拝による神さまと人の関係が整えられて初めて、人の間に生きることを本質とするわたしたちの対人関係が整えられます。御顔を仰ぐ者たちにおいて、たがいの顔が、神の栄光を反映する者として、互いに互いを励まし、支える者となります。パウロはこの信仰の筋道をよく理解している伝道者でした。

最後に、この手紙の書き方で興味深いのは、テサロニケの人々に会いたい、顔を見たいと願いながら、それがかなわない状況をパウロがサタンに妨げら

れたと表現していることです。これなどは現代のわたしたちの感覚からすると、奇妙な表現に聞こえます。たとえばわたしが東京に行くことを計画していたがサタンに妨げられたと言ったならば、皆さんはちょっと首をかしげると思います。実際には、パウロがテサロニケに行くことが出来なかったのは持病のせいではなかったかと言われていています。コリントの信徒への手紙の中にサタンの棘という表現で彼自身の持病について説明している個所があります。これを迷信のようだと言って退けることは簡単ですが、ここではパウロがすべてのことを神さまとの関わりで見ていることを受け取りたいと思います。パウロの文章を読んでいると、主にあって、ギリシア語では「エン・クリストー」という表現がよく使われます。英語に直すと「イン クライスト」ということですね。主にあって、テサロニケ行きを希望し、あなたがたを励ましたいと願っていたが、持病によりかなわない。この事実を、人格を持った神さまとの対比で、神に逆らう存在であるサタンにより妨げられたと表現しているのです。こういう表現を現代のわたしたちが実際に用いるかどうかではなく、眼鏡をかけて視力を調整するように、現実を神さまの恵みの支配のもとにある世界として正しく見すえようとする信仰の目には、まさに顔に眼鏡をかけるように、そこに神さまの御顔を仰ぐことを通して、「主にあって」というフィルターを通すことによって、視力を矯正して判断する生き方を身に着けていたことが伝道者パウロの生きざまであったと思うのです。このことを御一緒に聴きとりたいと願います。

お祈りいたします。

神さま、暗い夜の間も守られて、新しい朝、新しい命に生かしてくださり、わたしたちを御前に招き、愛する兄弟姉妹とともに一つの民として養ってくださったことを感謝いたします。このようにして互いに相集い、希望の根拠であるあなたを喜び祝い、賛美することが、わたしたちの生きる力です。どうか、わたしたちを導き、礼拝からはじまる日常の日々と整えてください。主が、わたしたちのために十字架にかかれ、三日目に復活をなさって天に昇られ、いまもわたしたちを聖霊において執り成し、わたしたちと共にいてくださるといふあなたの真実によって、わたしたちを強め、用いてください。いつもわたしたちが、世に勝利されたキリストの民の一員であることを思い起こさせてください。この祈り、主イエス・キリストの御名によって祈ります。

アーメン

讚美歌 21-465 「神ともにいまして」(2番)

荒れ野をゆくときも あらし吹くときも 行く手を示して
導き給え、主よ。また逢う日まで また逢う日まで
神の恵み たえせず共にあれ

使徒信条

聖餐式

献 金

報 告

添付の週報をご覧ください

祈 禱

主の御名が崇められるように。コロナウィルス感染症対策
下で、医療・介護・福祉に従事する方たちのために、とも
に礼拝をささげる日が与えられるように。

主の祈り

天にまします我らの父よ
ねがわくば御名をあげさせたまえ
御国を来たさせたまえ
御心の天になるごとく 地にもなさせたまえ

我らの日用の糧を 今日も与えたまえ
我らに罪を犯す者を 我らがゆるすごとく
我らの罪をも ゆるしたまえ
我らを試みにあわせず 悪より救い出したまえ
国と力と栄とは 限りなく汝のものなればなり

アーメン

祝 禱

主イエス・キリストの恵みと、
父なる神の愛と

聖霊との親しき御交わりが
主の恵みのご支配を信じてこの世を生き抜く
あなたがた一同の上に、とこしえにあるように。

アーメン！